

喜和田鉦山地底探検記

子供の頃にジュールベルヌの地底探検の物語を読んでワクワクした人は沢山居ると思う。地球の中に奥深く入ってゆくとそこは大きなドーム状になっていて、微生物の働きで青白く光っている別世界が存在する。日本に残されたそんな最後の地底探検をする機会に恵まれた。山口県にある喜和田鉦山について報告したいと思う。



「地底に輝く天の川」

鉦山の坑道に奥深く入ってゆくとそこには将に地底探検の世界が広がっていた。青白く光る石が坑道の壁にも坑道の下にも続いている。ミネラライトで照らしてみると坑道の壁全面に不可思議光が浮かび上がってくるのだ。私自身、これほど美しい光景を見るのは中央アジアで夜空を見て感激した時以来だ。暗闇の中に広がっていた宇宙の輝き即ち満天の星屑を見た感激に比類する経験である。



筋状に広がる光る石の正体はタングステン鉦石層である。この地層は世界一のシーライト（灰重石）含有量を誇る鉦山である。坑道の中は気温が一定で17度前後だが、坑道内の移動はかなり厳しく若い人でもかなりの苦痛であり汗が染み出して来る。

カンテラと懐中電灯がなければ漆黒の暗闇で、右に左に蛇行する坑道に迷い込むと二度と地上には出てこられない恐怖にさいなまれる。一番奥の12坑体入り口まで600メートルほども歩いたろうか、横坑から縦坑に入る。30メートルほど狭い鉄はしごをよじ登ってゆくと100畳はあると思われるドーム状の採掘現場に到着する。



この12坑体が圧巻である。ドームの天井を照らすと全面が天の川の様な光を放っているのだ。壁面の何重にも重なる白い岩石層が青白く光るのだ。疲れたのも忘れてしばし妄想の世界に入り込むと沈黙の中に感動が押し寄せてくる。まさにジュールベルヌの地底探検の世界である。

「喜和田の歴史は330年前に開山した」

喜和田鉱山は休山して既に15年以上が経つが、維持管理が困難であるという理由で昨年12月に坑道を塞いでしまった。何としてでも光る石の洞窟が見たかったので無理を言って坑道見学をお願いして実現する運びとなった。このチャンスが日本で最後の坑道調査になることは間違いなかった。



実際に坑道の入り口はほとんど塞いであるので鉱山に入り込むには狭い隙間を匍匐前進で進まなければ中には入れないのだ。



喜和田は江戸時代(330年前)に発見されたが明治、大正、昭和とお国のためにタングステンを供給してきた。平成に入り中国のタングステンが過剰供給のために国際市況を崩してしまい世界中のタングステン鉱山は閉山に追い込まれた。喜和田もその例外にはなりえなかった。

世界一の高品位を誇る優良鉱山も残念ながら平成4年に330年の長い歴史を終える事になった。タングステンの国際市況は昨年年初から上昇を始めている。中国は90年代までは有り余っている国内の資源を湯水のごとく対外輸出に回していたが中国の景気が好調で国内需要を満たすために対外輸出の制限を加えるようになってきた。エネルギーの不足や環境汚染問題も資源ナショナリズムを増幅することになった。私は30年以上タングステンの業務に携わってきたが最後の鉱山をこの目で見ておくことは望外の喜びである。

「長原さんは喜和田の守り神だ」

先導役の長原鉱山長は78歳であるが矍鑠とされておりとてもそんなお年には見えない。長原さんが喜和田鉱山に入ったのは昭和30年代である。東京オリンピックの前と聞いたがそれ以来、京都の鉱山と喜和田の両方を行き来して管理されたという。

長原さんは京都大学を卒業して鉱山会社に入社して以来(昭和30年代から)喜和田鉱山を見てこられた。鉱山は閉鎖する事になったが、鉱山を訪れる人も多く、子供たちや観光客のために長原さんは案内役を買って出た。鉱山の麓には鉱物博物館を設置し奥さんとともにこれまで喜和田を守ってこられたのだ。お話を聞くと採鉱の専門家で山のことなら何でも知っておられる生き字引であることが分かった。今の日本にはこれだけの経験のある鉱山の専門家は残ってはいないとの事である。鉱山屋には2種類の研究者がいる。地質の専門家はジオロジストといって「ともかく 鉱石を見ているだけでこれに勝る楽しみはない」という研究者である。

もうひとつの鉱山屋はマイニングエンジニアという名前の「この鉱石はお金になりそうだということばかり考えている」研究者である。長原さんはこのどちらにも入らない。これらの世界を超越された風格がある。「マイニングジオロジスト」というよりも「喜和田の守り神」といったほうがしっくり来る人だ。



「喜和田を残したい。日本の鉱山を残したい」

去年の11月にインジウムで有名な日鉱マテリアルの豊羽鉱山が閉山した。これでとうとう日本に残る現有鉱山は菱刈金山だけになってしまう。南蛮貿易のバスター品目は黄金、白金、赤金（金、銀、銅）であった事からも分かるように江戸時代の日本は何と鉱山国家だった。



マルコポーロが東方見聞録に書いた「黄金に満ちたる島、ジパング」は本当だった。大航海時代に日本にやってきたオランダ人やポルトガル人は日本の赤金を買ってみたら黄金が沢山入っていたが、金の評価はせず に銅の価格だけで長い間取引をさせられたようだった。日本の鉱山は外国人に騙されながらとうとう掘りつくしてしまった。中国のタングステン資源も言わば同じことで中華人民共和国が外貨収入を目的として「乱掘と飢餓輸出」を繰り返した結果が今の状況である。貴重な資源は有限である。中国からもいずれタングステンも供給されなくなる日が来る。その日の為に細々とでも良いから喜和田を残すべきである。金属産業はある意味ではエネルギー産業とも言える。原油の価格に連動してすべてのレアメタルは高騰している。



観光鉱山でも良いから未来の日本人の為に喜和田を残しておきたい。経済合理性がなくとも子供たちが地底探検をして光る石を見たら、きっと感激するはずだ。10年や20年の経済性だけで判断せずに330年も続いた鉱山に思いを馳せるロマンも残しておきたいものだ。

感激した子供たちが鉱山学に興味を持って将来には海外の鉱山を開発してくれるかもしれない。そんな思いを胸に抱いて鉱山を後にした。